椙山女学園大学教育学部紀要（*Journal of the School of Education, Sugiyama Jogakuen University*）**15**（1）: 289–290（2022）

椙山女学園大学大学院教育学研究科　修士学位論文要旨

小学校の外国語教育における海洋汚染問題を使用した CLIL の効果
── 児童の動機付けを中心に ──

19DA003　長谷川千璃（指導教員：安達理恵教授）

問題と目的　外国語専科の教員として指導していくと，児童間の学力差はもちろん，学びのモチベーションの差が大きい。モチベーションを高めるためには，新しい外国語教育法として着目されている CLIL (Content and Language Integrated Learning) が有効であると考えた。本研究では，言語と他教科の内容を関連させて学ぶ CLIL が児童の学びの姿勢にどの程度影響があるのかを実践して検討することを目的とした。

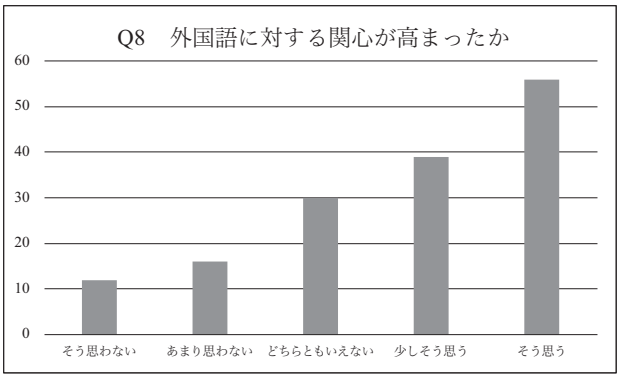
廣森（2015）は，英語学習には学習の動機づけが重要で，Deci & Ryan の自己決定理論に基づき自立性・有能性・関係性の 3 つの心理的欲求が関連し，動機づけは常に一定の状態にあるわけではなく，まわりの学習環境と密接に関わり合いながらダイナミックに変化しているとしている。また外国語教育における動機づけ理論では，学習者の動機づけを高める技術が教師には必要であると指摘している（Dörnyei, 2001/2005）。

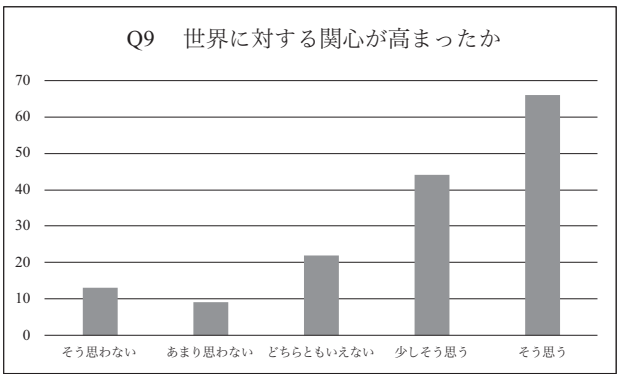
CLIL は内容統合型学習と呼ばれ，ヨーロッパが起源の教育法である。各教科の学習内容と組み合わせた学習法で，言語習得のために，既習の内容を結びつけて学習することで学習者の理解度が高まるとされる。CLIL には4C と呼ばれる要素があり, Coyle, Hood & Marsh (2010) によると, 内容・言語・思考・異文化の 4 つの要素をバランスよく取り入れることで，CLIL の授業は効果的であると主張している。笹島・山野（2019）によると，CLIL はまさに学習指導要領の目標を実現するための教育で，カリキュラム・マネジメントの視点からも，他教科と外国語学習を組み合わせて行うことで，深い思考活動や協同学習，異文化理解を促すことができるとしている。

研究　対象　202X 年 9 月から10月にかけて，小学校 6 年生 161 名を対象に，CLIL 実践による外国語授業を行った。

手続　題材は外国語科で用いている東京書籍の教科書 New Horizon Elementary 6で， 8 時間完了の内の 5 時間分を CLIL で行った。教材の内容は，地球に住む生き物のすみかや食べているものについて伝え合うという単元だが，教科書の発展的学習として，海の生き物に焦点を当て，海洋プラスチック問題について取り上げた。写真や映像などの具体物を使用しながら，児童に現状を知らせ，CLIL の4C の 1 つである思考を深める活動として，海の生き物のすみかを守るために，自分自身ができることは何かというテーマで，児童 1 人 1 人に考えさせ，ポスター作成を行った。なお分析方法として，児童には授業後に選択式 9 項目（そう思わない，あまり思わない，どちらともいえない，少しそう思う，そう思うの 5 つの選択肢）と記述式 2 項目で作成した単元ふりかえり調査用紙に回答を求めた。

結果　まず選択式 9 項目については､「そう思わない」から「そう思う」までを 1 ～ 5 と得点コード化して分析した。全体的にみると，「そう思う」が圧倒的に多く，「少しそう思う」も多いことから，ほとんどの児童がどの項目においても肯定的な考えを示したことが分かる。一方，授業をきっかけにもっと知りたいと思ったかという学習の動機づけに関わる部分の 1 つである Q5では，もっと知りたいと思った児童が他の項目に比べるとやや少なく，このことから，全員の動機づけを高めることは難しいと考えられた。一方下図のように Q8 と Q9に関しては，「そう思う」と「少しそう思う」の肯定的な回答が過半数を超えており，今回の授業を通して児童の外国語や世界に対する関心が高まった傾向が見られた。しかしながらいずれも「そう思わない」と答えている児童も一定数いたのが課題である。





記述式（Q10・Q11）の質問項目には，樋口の KH-Coder

3[1]（テキストマイニングの１つで、使用頻度の高い言葉を構造化して抽出する分析法）を用いて分析した。Q10の児童の記述では，「海の生き物が今プラスチックで命を落としたり，こんなにも苦しんでいたりしているなんて知らなかった」などの海洋プラスチック問題や生き物たちに関する感想が多く見られ，児童が自分自身の問題として考えることができていたように考えられる。一方，Q11では，「プラスチックを使わない選択をする」という具体的な環境保全のための解決策が多く記述されており，児童が授業を通して主体的に取り組んでいたことがわかった。

考察　全体的な結果として，ほとんどの項目で最も肯定的なそう思うと回答した児童が多く，ほぼ全ての項目で肯定的な答えの方が多いことから，CLIL を用いた本実践において，児童の学びの意欲はある程度高まっていたと考えられる。態度面では日頃から英語が好きという児童は本実践でも外国語に対する関心が高まったと分析でき，学習の理解度では大半の児童が学習内容を理解し，知識が身についていると考察できる。また，まとめの発表においても児童が学習表現を使い，上手く発表することができていたと考えられる。一方世界への関心や環境問題については，具体物を教材として用いたため興味が湧いたものの，世界各国の環境対策という視点までは難しかったかもしれない。生き物のくらしについて興味をもった児童は，自分自身でもさらに調べ，もっと知りたいという思いを持っていたことが考えられる。児童にとって今回の環境問題に関する改善策を主体的に思考することができていたと考えられる。

今後の課題として，児童の動機づけがより高まるように本実践を見直し，引き続き CLIL の実践を行っていきたい。

注

１）アプリの KH-Coder 3は樋口耕一の以下のサイトからダウンロードできる。http://khcoder.net/

引用文献

Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning.* Cambridge University Press.

Dörnyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom.* Cambridge University Press.（米山朝二・関昭典訳 (2005)．動機づけを高める英語指導ストラテジー35　大修館書店）

廣森友人（2015）．英語学習のメカニズム―第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法　大修館書店

笹島茂・山野有紀（2019）．学びをつなぐ小学校外国語教育の CLIL 実践―「知りたい」「伝え合いたい」「考えたい」を育てる―　三修社